

第15回の安城学園報告討論会は、「教育にイノベーション！ー無限の可能性に挑戦ー」というテーマで行うことにしました。今までも1テーマ1回では済まなかったので、大体5回位は同じテーマで展開したいと思っています。

今年度は分科会として6つ用意しました。第一分科会「キャリア教育の現在と今後」は、今、大学・短大だけではなく、実は高校教育もキャリア教育の必要性に迫られており、大学の報告を通してお互いに交流して学び合うことが極めて大事です。

第二分科会は『安城学園高校における iPad の活用と今後の展開』実践報告です。安城学園高等学校では今 iPad を使ってイノベーションということで2つのパイロット事業を行い、一つは授業の中でどう使うか、もう一つは一言で言うと「ペーパーレス」ですが、単に職員会議もペーパーレスで非常に良いということだけではなく、仕事の仕方が変わる、あるいは変える良いチャンスになるということです。

第三分科会「自ら学ぶ－PISA型学力による課題解決を目指して－」は、今日のメインテーマの一つですが、いろいろな課題がある中で、私たちにも子どもたちにも今一番大事なことは自ら学ぶことです。ここに軸足を置いて教育を展開する必要があるということで、この分科会を設けました。

第四分科会『社会人基礎力』実践交流」は、社会人基礎力を学園全体にさらに理解を深めて浸透を図るために設けました。

次に、「東日本から学ぶ」ということで、第五分科会「私たちのおもい～東日本大震災を経験して」を用意しました。今回は、幼稚園は別立ての企画にしようと考えておりました。いろいろと進めていく中で、これは幼稚園の先生だけに必要なものでも、興味関心の

あるものでもないと考え、幼稚園の先生を中心に、幼稚園以外の教員・事務職員の方も参加していただくようにしました。

最後の第六分科会は「日本の保育を変える」です。これは保育のことだから、高校の先生、大学の先生には関係ないだろうということではありません。講師の山口洋さんは、保育についてはほとんどの素人の状態で会社を設立した民間の経営者です。この民間の発想を学ぶことは非常に勉強になると感じます。

今からお話をする内容は、レジュメを読むと「一度は聞いたことがある」「二度も聞いたことがある」と思う方もいるかと思います。大切なことは「何回聞く」ことではなくて、どれだけ深く心に留めるかということです。本学園は100周年を迎え、新しい100年に向けて歩みはじめておりますので、そのための基礎・基本となることをお話します。

子どもたちだけでなく教職員の皆さんも、昔に比べて多様化してきています。そこで、一人ひとりがどれだけ自分の思いで頑張っているか、実際にはなかなか成果に結びつかなかったりします。もしこの講演が1秒しかなければ、「自由に振る舞うために、不自由を如何に受け入れるか」ということを言います。世の中にはのっぺらぼうの自由はありません。絵画、日本画、彫刻でも何でもそうです。例えば、短歌の場合「五七五七七」という制約条件があります。この形式をしっかり守って、はじめて芸術というものが花開くわけです。今日は一言で言うと「自由に振る舞えることは非常に大事です。しかし、その前に不自由を受け入れることがもっと大事です。」というお話をしたいと思います。

学園高校では iPad を使っているの、何日か前のある日、坂田校長が「プレゼンで iPad を使ったらどうですか」ということを急に言ってきました。「その通りだ」と思ったら、石原先生や岡山先生や吉川君がパッパッパッと環境を準備してくれたので、今日は iPad を使って基調講演を行います。

iPad を使っていると、「FTP」とか「プロトコル」とかいろいろな新しい概念が出てきて私も混乱しています。しかし、まずは混乱することがイノベーション



ンには大事だと思います。いつまでも混乱をしていたらいけませんが、いろいろな新しいことに遭遇した際、環境の変化に適応するように動くのが庶民性というものです。家ではガラケーの携帯電話を使っていたので、ガラパゴスとか言われていました。やっとガラパゴス島からちょっと遠出している感じです。

〜〜・〜〜・〜〜・〜〜

それでは、『教育にイノベーション』を興すとはどういうことか」ということをお話します。まず、基礎基本は温故知新です。現在、本学園の各設置校それぞれ抱えている当面の課題を軽くポンポンポンと挙げていきます。

管理栄養士専攻では、国家試験では合格率100%を取ったけども、なぜか募集が他校に流れてしまう。そうならばやはり何かプラスαがいるのではないかと。

幼児教育学科でいうと、入学者数は大体定員を満たし、皆さん努力されていると思いますが、子ども教育系のニーズは大学に移っているのが世間の流れです。そうならば、子どもたちにとって大学に行くよりも短期大学に行った方がプラスになること、これが課題になります。さらに、公務員に対する就職実績を挙げることで、これが課題です。

食物栄養学科の課題は、少人数で仲がよく非常に順調ですが、何とかして40名の定員を80名とは言わなくても60名にしたい、そういう課題があります。

10年ほど前、国際教養学科は定員を割って約3年間定員の50%位の入学者数が続きましたが、そのような中で短期大学の先生方がいろいろ考えて、日本で三番目となる地域総合学科となる生活デザイン総合学科を立ち上げました。これは近々の『教育にイノベーション』を興した例だと思います。

それから豊田学舎の課題は、何だかんだ言っても定員の充足です。高等学校ではあと何年後かに複合選抜制度の変更があります。それに対して前向きな積極的な対応が課題です。幼稚園の場合は、やはり安定的な募集です。単なる幼稚園としてではなくて、安城市の中の子育て支援の一環になるようにもう一度組み立て直すという課題があります。

それぞれの設置校、あるいは法人にもいろいろな課題があるわけですが、設置校ごとに「自分たちの学校は自分たちでつくる」という精神で望むことが大事だ



と思います。そのためにはまず『教育にイノベーション』をなぜ興す必要があるのかを理解しなければなりません。

経営資源というのは「ヒト」・「モノ」・「カネ」・「情報」のことです。「カネ」については大切に使うことが大事です。「モノ」についても大切に使うことが大事です。これに関しては、現在、施設設備プロジェクトチームの方で作戦を立てて進めているところです。今日の焦点は「ヒト」です。これが第一点です。本当に当たり前のことですが、私は『ヒト』は安城学園の財産である」と考えます。これまで想像を絶するような苦難なことがありましたが、それを乗り越えられたのも、これからの厳しい時代を前向きに乗り越えていくときに必要なものも「ヒト」という財産だと思います。

一番述べたいことは、「教職員一人ひとりが『誰でも無限の可能性を持っている』と心の底から本当にそう思っていますか』という一言です。本当にそう思っているのと思っていないのでは全く違います。寺部さんは強い信念を持っていました。だから、女の人が行く学校がなかったあの時代に、「では、自分で学校をつくろう」と決意して本学園をつくりました。

もう一つ述べたいことは、本学園の教育の理念は、『一人ひとりの潜在能力を開発』ではなく、『一人ひとりの潜在能力を『可能性の限界まで』開発する、それが教育である』ということです。この理念の下で100年間教育を展開してきました。100年間持続したということは、教職員一人ひとりが「本学園の教育はこれだ」と信じて、今までに数々のイノベーションを興してきたからだと思っています。

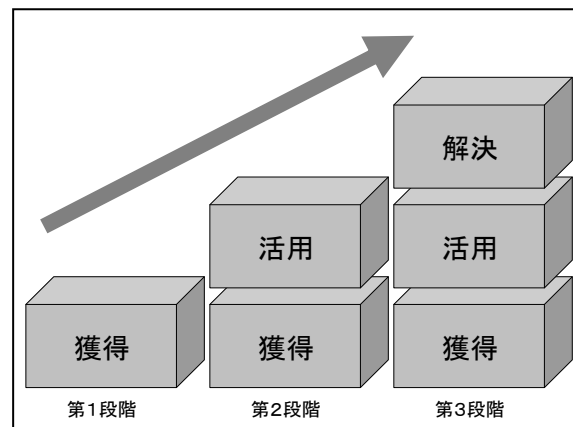
「誰でも無限の可能性を持っている」のにもかわらず、現実的には「あれが出来ない」、「これが出来ない」、「何々が出来ない」、「大学に入ってアルファベットの覚えられない」とかいろいろいろいろあります。

でも、この時に一番大事なことは「目の前の子どもたちに能力がないわけではない」と本当に思えるかどうかです。「誰でも無限の可能性を持っている」のにもかかわらず能力を発揮できないことを寺部だいは「もったいない」と思い、「一人ひとりの潜在能力を可能性の限界まで開発する」ことが教育だと考え、学校をつくりました。「誰でも無限の可能性を持っている。」このことを実現するために、『教育にイノベーション』が、昔も必要でしたし、今も必要ですし、これからも必要になります。これが第一点です。

それから新年の挨拶に書きましたが、幼稚園から大学までである本学園の当面の課題は、「現在社会の中で人々が直面する現実の課題を適切にかつ実践的に解決する能力を身に付けて、「地域に貢献できる人材を育成する」」ことです。私も東北に二・三回行きました。行った回数はまだまだ少ない方ですが、一般の人とお話する機会がありました。聞いてみると、復興財源の話に関して「お金は必要だ。しかし、一番必要なのは人材だ。」とのことです。やはり「自分が生まれたこのまち、あるいは自分が住んでいるこのまちで一生生活をしたい」と思う若者が財産だということです。これは、別に東北あるいは大船渡だけのことでなく、愛知県においても、三河においても、西三河においても、これまでも大事なことでしたが、これからますます大事になります。そういう意味で「地域の人材を育成する」という教育の課題があります。

そして、この課題に対してどのような教育を展開するかというと、本学園の場合は「建学の精神を核にした教育」です。これまでも大事にしてきましたし、これからも大事にしないといけません。しかし、現代の社会状況あるいは日本の社会の変化を考えると、これだけでは不十分です。あと二つ「社会人基礎力を核にした教育」「PISA型学力を核にした教育」が必要です。そして、これを展開するためには『教育にイノベーション』が必要です。これが二点目です。

明治時代に学校教育が始まってから、学校教育の基本要素は「知・徳・体」の三つと言われています。ところがかなり前から「これでは何か足りない」と言われています。確かに「知・徳・体」は大事です。しかし、これからの社会をたくましく生きていくためには、もう一つ何か足りないのではないか。ここでは「行」と書きましたが、これがいわゆる行動特性です。本学

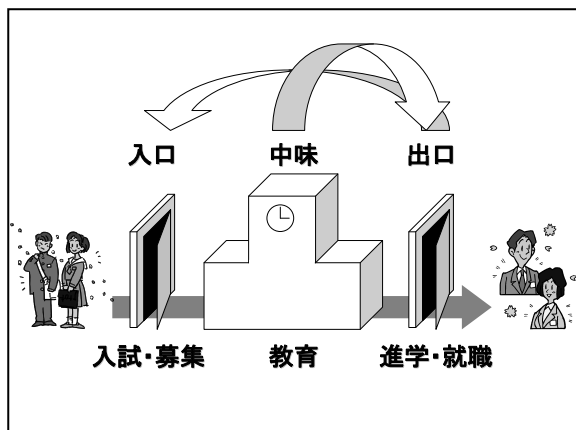


園の場合、社会人基礎力を採用しています。「知・徳・体」に新しく行動特性を加えた「知・徳・体・行」という教育モデルを開発するために『教育にイノベーション』が必要です。これが三点目です。

次はこちら（上図）を御覧ください。先ほどもそうですが、別に昔の教育が悪かったというわけではありません。昔は知識・技術を獲得させること、これが先生の仕事でした（第1段階）。そして、知識・技術を獲得すること、これが学生の仕事でした。実際に獲得したかどうかは、テストを実施して80点以上が「優」だとか、そしてオール5とかあるいは「優」の数かどうかで、優秀さを決めていました。

しかし、今分かっていることは、知識・技術を獲得することは大事だけど、知識・技術を獲得しているだけでは社会では何の役にも立たないということです。つまり、知識・技術を獲得して活用できることが大事だということです。先生の役割は、知識・技術を獲得させて、かつそれを活用できる力を身に付けさせることです（第2段階）。学生の役割は、知識・技術を獲得しただけで終わりではなく、それを活用できるようになる必要があります。

しかし、獲得と活用だけ身に付けても何のために勉強するのかが見えてきません。それは、問題・課題を解決する力を身に付けるためです（第3段階）。個人レベルの課題、家庭レベルの課題、地域社会レベルの課題、会社レベルの課題と現代社会の課題といえどもいろいろあります。しかし、課題解決こそが実は仕事の成果なのです。だから、これからの学校で何が求められるかというと、知識・技術を獲得し活用して課題を解決する能力、これが問われている時代です。第一段階、第二段階だけでなく、第三段階の教育を展開していくために『教育にイノベーション』が必要です。



この絵（上図）は、入口・出口・中味を表します。出口の方は大学では就職、高等学校では就職と進学があります。全国の国立、公立、私立を問わず、幼稚園から大学を問わず、入口問題で頭を悩ましているのが実態です。しかし、入口を制するには入口だけを見ても駄目で、出口を見る必要があります。

全然違う例を挙げます。私はあまりショッピングをしません、名古屋で言えば名古屋駅が一番栄えていて、ウィンドウショッピングをする人を眺めていると、デザインが気に入っても色が気に入らないだけで消費者は見向きもしません。ポイです。消費者の目は極めて厳しいものです。自分が一生懸命稼いだお金だから、自分が納得するものを買いたいと思うのは当然です。しかし、お店の方はお客さんに対して一切言い訳とか愚痴を言いません。「この商品を開発するのに一年間時間をかけたのに！」というようなことは一切言いません。教育も出口で評価されています。従って、出口で勝負すべきだと思います。入口で勝負するには出口で勝負するという意味で、「出口が入口を制する」のです。

しかし、出口・出口・出口と頑張っている、例えば「エントリーシートの書き方をしっかり教えています」というだけではいいはずがありません。そのような小手先だけで勝負できません。出口で勝負するためには中身で勝負すべきです。そういう意味で、「中身が出口を制する」のです。同じように、私たちの仕事は事務職員も含めて中味で勝負するということです。このためにも『教育にイノベーション』が必要です。

次のスライド（右図）は、すぐにはピンと来ないかもしれませんが、これは毛受氏（一般財団法人アスパシ教育基金代表理事）のアスパシの資料を貸していただいたものです。その前に、人口推計のグラフを見ると、これからどんどん人口は減っていき、平

均年齢はそのうち50歳を超えますが、人口はずっと上り坂ではなくて下り坂に転じます。

確かに子どもの数は少なくなっていますが、しかし先ほどのスライドを見ると、違う観点の問題が存在することに気が付きます。高等学校に進学する中学生は、今は大体95%位で約129万人です。この内、約21万人が就職し、約87万人が大学・短大・専門学校等に進学し、約12万人が中退、残りの約9万人がフリーター、ニートになっています。そして進学した学生の内、約7万人が大学院に進学し、約56万人が就職し、約9万人が中退、残りの約13万人がフリーター、ニートになっています。さらに、高校・大学等から就職した約77万人の内、約23万人は3年以内に離職してしまいます。最終的に仕事に定着できた若者は、最初に約129万人いた内の約54万人しかないのが現実です。

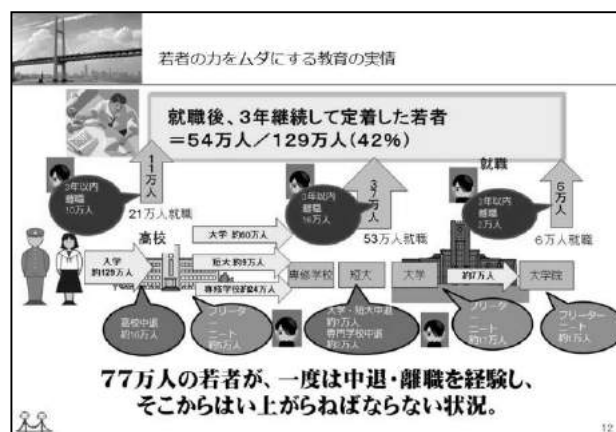
これは、若者が悪いという観点だけではなくて、私たちの教育が今のままでは良くない、『教育にイノベーション』が必要であると考えるべきだと思います。『教育にイノベーション』がいかに必要かについては大体この位にしておきたいと思います。

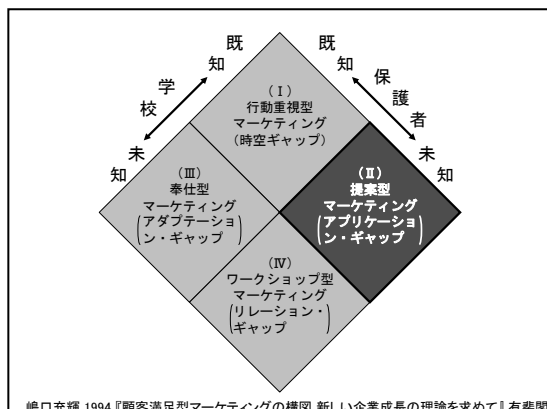
～～～～～～～～

今からの話は、どちらかというとマーケティングの分野で話される話です。この図（次頁）は、買い手がニーズを「分かっている」「分かっていない」、売り手がニーズを「分かっている」「分かっていない」という視点でマーケティングの構造を整理したものです。

戦後の日本では、例えば白物家電（洗濯機・冷蔵庫等々）のように、国民が欲しいもの（＝ニーズ）がはっきりしていて、企業は何を作れば良いか、つまり洗濯機・冷蔵庫を作れば必ず売れると分かっていました。これは一番上の「行動重視型マーケティング」です。

しかし、今の時代は一定限の需要が満たされている





ので、買い手にとって真のニーズが十分明確ではないという意味で「提案型マーケティング」を展開していく必要があり、学校の場合、積極的に前向きに教育を展開していく必要があります。そこで「学校法人安城学園ではこのような教育を行っている」というブランドを作り上げることが重要になってきます。

アップル社の製品にはどの製品にもこのリンゴのマークが付いていて、リンゴのマークを見ると、ほとんどの人が「あのアップルだ」と思います。これは単なる商標ではなく、アップル社のいろいろな事業展開そのものを象徴しています。だから、本学園のシンボルマークを見たときに「学校法人安城学園」がイメージできること、そして、幼稚園を訪れても、高校を訪れても、短期大学・大学を訪れても訪れた方々に同じ香りがすると感じてもらえるようにすることです。そして、この同じ香りの中で、それぞれの設置校が自由に振舞っていただければと願っています。

～～・～～・～～・～～

次の話題は「無限の可能性に挑戦」ということです。ここで言う「無限の可能性」というのは、昔、数学の時間に習った「無限大＝自分がここにいて遥か彼方にある」そういうイメージではありません。ロシアにヴィゴツキーという心理学者がいて、今、注目されています。彼が考えた「発達の最近接領域」という概念が「無限の可能性」のイメージを把握するのに非常に役に立ちます。

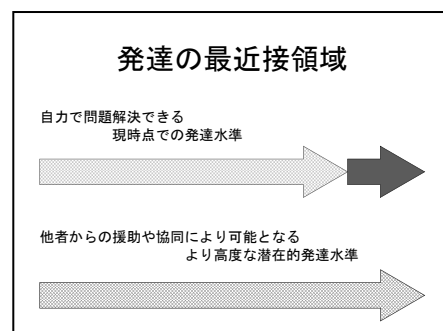
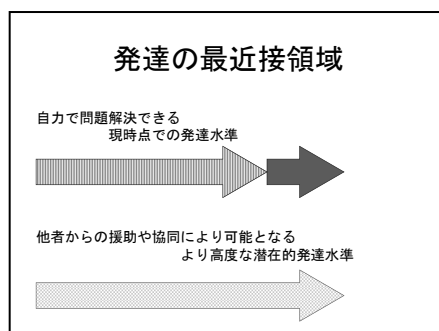
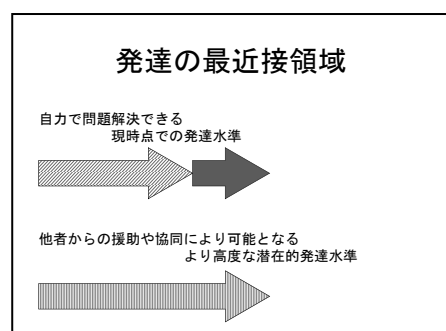
スライド（左下図）の青色の矢印（斜線）、これは「自分の力でここまでできるという最大値」を示します。10年先では長過ぎ、1週間では短過ぎるので、例えば大体1年間、独学でがんばるとここまで発達できるという指標です。この時、緑色の矢印（縦縞）は、他者からの援助、あるいは協同によって目の前の子にもある潜在的な能力がさらに発達できる水準です。

そして、緑色の矢印（縦縞）まで発達できる時に、さらに他者の援助、協同があると、赤色の矢印（無地）まで能力が発達できる可能性、私たちから見れば「教育の可能性」、子どもたちから見れば「学習の可能性」があります。

能力といってもいろいろありますが、例えば昔、最初は自転車に中々乗れなかったでしょう。お父さんに手伝ってもらったりして乗れるようになる。そして一度乗れるようになると、後はその能力でさらに乗れるようになります。

つまり、緑色の矢印（縦縞）から始まって、同じ先生でもいいし、あるいはフィギュアスケートの例のように違う先生でもいいですが、先生の協力があって青色の矢印（斜線）まで到達できたとします。そこで、これでおしまいというわけではなくて、良き指導者を得たり、良き環境を得たりすると、また伸びて黄色の矢印（市松）まで到達できます。これが潜在的な発達水準です。赤色の矢印（無地）と引き算すると少し短いかもしれませんが、今度は黄色の矢印（市松）まで発達した時には、さらに次の発達水準があります。

一番のポイントは、「私はもう60歳だから、これでおしまい」というのは本人が思っているだけで、全然関係ないことなのです。産まれたばかりの赤ん坊を見ると、誰でも「無限の可能性がある」と思うでしょう。まだ小さいころは、親も子どもが「無限の可能性」を持っていると思っているから、ピアノを習わせたりします。しかし、中学生位になると、お父さんお母さんが「まあうちの子は大体こんなものだ」と思ってし





まうことです。こんな風に思ってしまうと、子どもの成長はそこでおしまいになってしまうのです。

岡崎城西高校の校長の時に、中学校の説明会でこう言いました。「自分の子どもは大体この位だと思っていませんか。しかし、そうではなくて親バカでも結構だから、今は出来なくても『自分の子は絶対に出来る』と信じられるお父さんお母さんのお子さんは、岡崎城西高校に来ると絶対に伸びる」という話をいたしました。

これは何も中学生、高校生、大学生だけの話ではなくて、もう既に社会に出た私たちにも「発達の最近接領域」というものがあります。私の言っている「無限の可能性」というのは、不定形な「無限の可能性」ではなくて、常に自分の眼で確認できる「無限の可能性」です。岡崎城西高校にコーチがいます。生徒本人の素質もありますが、本人の力だけではココまでしか伸びないけれどもコーチが付いているからアソコまで伸びる可能性があるという感じです。

～～～～～～～～

レジュメの中に書いてある「何故『教育にイノベーション』が必要なのか?」については、大体6点位に整理してお話をしました。次に、「誰が『教育にイノベーション』を興すのか?」ということですが、それは私たち教職員です。その次にある4番目の「『教育にイノベーション』を興すために必要なもの」は何かというと、それは「不自由を受け入れること」です。

先ほどお話をいたしましたように、「いい作品ができる」「いい作品を作る」ためには、例えば短歌では字余りやあるいは字足らずがあると「五七五七七」の形に必ず収まるように他のもっと良い表現はないかと推敲します。「実際に自分が言いたかったことは何だろうか」と。そういう推敲を重ね、最終的には「五七五七七」の形にさせます。

他の事例でもそうです。絵画の世界では、「油絵を選ぶのか」「墨絵を選ぶのか」ということ。これは「対象を限定して、自分の全エネルギーを集中する」ということです。本学園の場合は、「学校法人安城学園は名古屋には進出しない」という選択をしています。「如何に苦しくてもこの三河、つまり西三河という地域から逃げずに頑張る。」これも不自由を受け入れるということになると思います。

次に見ていただきたいのは、この「知・徳・体・行」と書いてある表（下表）です。皆さんは全員、高等学校に通い、大学あるいは大学院あるいは短期大学を卒業したと思いますが、それでは「社会に出て仕事をす
る上で、学校で学んだことをどれくらい使っていますか」ということをお聞きしたいです。

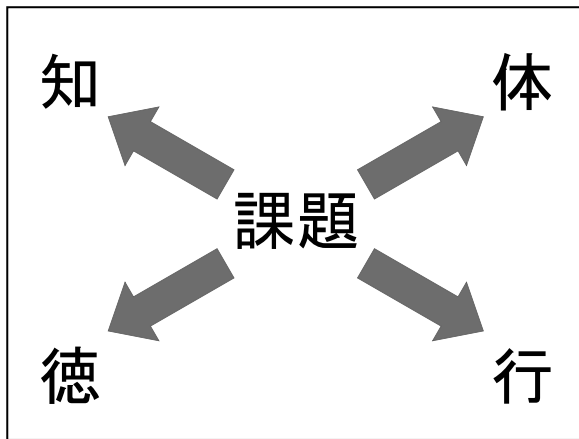
例えば、数学の二次方程式が、仕事をする上で一番役に立っているのは学校の数学の先生ではないでしょうか。しかし、他の人は社会に出るとほとんど活用する機会がありません。今までは将来必要だからといって学校教育を受けてきただけなのです。「二次方程式を使うとこんな社会の問題が解決できる」ということは教えられていません。

時間の関係で簡単にはしります。

例えば、入力が増えると出力も増えるという関係があったとします。これをグラフにすると、単調増加関数になります。一番単純な例は右上がりの直線です。この直線の場合、X軸との交点は1個であり、解は1個です。しかし、二次方程式の場合には（一般的に）答えが2個あります。ですから、「数学は答えが一つだ」というのは、この例から分かるように一般的に嘘です。

もう一つ例を挙げます。ある新聞の売り子がいたとします。今まで、一部10円で500部売れていました。1円値上げして11円にしてみたら、売り上げが

	知			徳			体			行		
	獲得	活用	解決	獲得	活用	解決	獲得	活用	解決	獲得	活用	解決
大学												
高校												
中学校												
小学校												
幼稚園												



伸びました。これに気を良くしてさらに1円値上げして12円にしてみたら、またまた売り上げが増えました。そこで、調子に乗ってさらに3円値上げして15円にしてみたら、売り上げは逆に減ってしまいました。世の中そんなに上手くいくものではありません。

この売り上げをグラフにすると、山型の二次方程式のグラフになります。同じ売り上げを実現する価格は2個あります。だから、世の中はもっと複雑ですか、解が2個や3個ではなく、もっと多くの解、時には無限個の解決を持つ課題があります。

そこで、この図（上図）です。今までの教育では、「知」を身に付け、「体」を鍛え、「徳」を磨いてから課題を解決していました。学校で知識を身に付けて、学校を出てから課題に取り組むというスタイルです。しかし、これからの学習は、まず解決すべき課題があり、その課題を解決するために必要な知識・技術、体力、行動特性を身に付けるというように、教育そのものに対する発想を変える必要があると思います。

講演の最初の方で、「建学の精神」「社会人基礎力」「PISA型」の三つを教育の核として挙げました。「建学の精神」である「真心・努力・奉仕・感謝」をただ単に4つ並べて「真心が大事」「努力も大事」「奉仕も大事」「感謝も大事」ではこの「建学の精神」が死んでしまいます。

「努力」だけでは感謝の気持ちは生まれません。「真心」を込めないと感謝の気持ちは生まれないのです。「努力」だけでは感謝の気持ちは生まれません。「奉仕」が伴わないと「感謝」の気持ちは生まれないのです。つまり、「感謝」を得るためには、「真心」を込めた「努力」と、「真心」を込めた「奉仕」が必要なのです。式（左下）の答えの側にある「感謝」が最大の

真心（努力・奉仕）→ 感謝

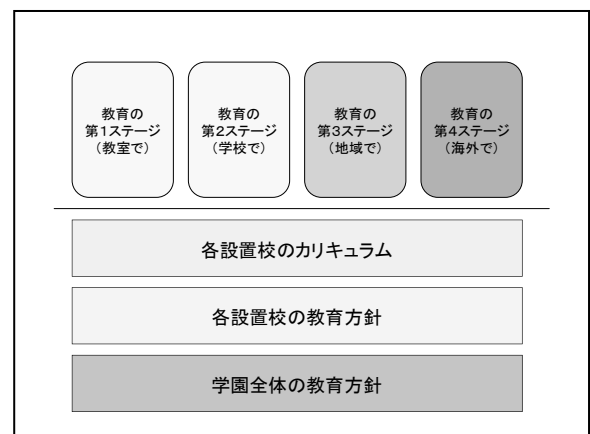
価値なのです。

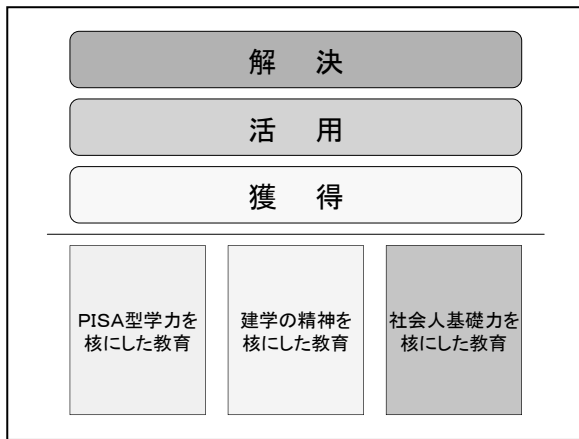
もし、教職員の皆さんが「誰でも無限の可能性を持っている」と信じることができれば、これは別に不自由でも何でもありません。それから「社会人基礎力」についても一つの枠組みです。今までは知識・技術を「獲得」し、それを「活用」することの繰り返しでした。しかし、これからはその知識・技術を「解決」レベルまで身に付ける必要があります。このことは学園から皆さんに対しての要求になります。事務職員の方も、単に知識・技術を「獲得」「活用」に留まるのではなく、問題を「解決」する能力が求められています。

参考になるかどうかは分かりませんが、このことは、iPad とアプリの関係と似ているのではないのでしょうか。iPad というシステムがあっても、これだけでは何もできません。このシステムの上で動くアプリが開発されてはじめて、使う人にとって役に立つものになります。

先ほど学園全体の教育方針をダーッと言いませうけれども、これはシステムレベルの話であって、これだけでは学生さんにとっては遠い存在です。学園全体の教育方針を受け、各設置校の教育方針を作成していますが、これでも学生さんにはまだまだ遠い存在です。そこで、設置校の教育方針を実現する形で、各設置校のカリキュラムを作ります。このカリキュラムの中で教育を行うという意味で教職員にとっては制約条件として機能することになります。

さて、スライドの図（下図）のように、「教育の第1ステージ」では授業を展開する上で必要な多くのアプリを開発して実行してきました。これからも同じです。「教育の第2ステージ」では、クラブ活動等を展開する上で必要な多くのアプリを開発して実行してきました。さらに、教育の第3ステージ、第4ステー





ジの教育を展開するための多くのアプリを開発して実行してきました。このように私たちが開発してきた多くのアプリが学園の教育にとって財産となります。授業で必要なものは皆さんが個別に開発したアプリであり、「これは良いものである」と学生・生徒・園児から評価されるものを開発することが大切です。これからは、このことをもっともっと意識的に行っていこうと思います。

このように、学校法人安城学園の教育システムの上で是非いろいろな創意工夫をして学生・生徒・園児から評価されるアプリを開発していただきたいと思います。

この図(上図)は、学生・生徒・園児だけでなく、僕らにとっての学習モデルでもあります。これからの学生さんは「解決」レベルまで身に付く教育が必要ですが、このことは同時に社会に出ている私たちにとっての課題でもあります。視点を変えると「何のために学校に通うのか」ということです。将来、修道院で過ごすのであれば、学校と社会とが分離していても構いません。しかし、学生さんにとって学校は社会に出る前の準備期間であって、いずれは社会に出て行きます。学生さんに「社会人基礎力が必要だ」「PISA型学力が必要だ」と言った時に、これらは私たちにも実は必要なものであり、私たち教職員もこの学習モデルの実践によって成長することになります。このことは単なる教材開発というレベルではなく、実は『教育にイノベーション』を興すことをねらったものです。

～～～～～～～～

最後に、安城学園教職員憲章を取り上げます。既にペーパーでは配布しておりますが、今パネルを作っております。今までお話した内容を分かりやすく言うと、理事長の言う「不自由」とはこの7項目です。この7

項目に対して「なるほど、そうだ」と心から共感できる人が学校法人安城学園の運命共同体の一員です。そういう意味でこの7項目を読んで終わりにしたいと思います。

一、「誰でも無限の可能性を持っている」という創立者の信念を共有しましょう。

一、家庭に温かい心、職場に新しい息吹を与えるために「真心・努力・奉仕・感謝」の四大精神を実践しましょう。

一、建学の精神の実践を通して、私たち一人ひとりの潜在能力を可能性の限界まで開発しましょう。

一、職場と地域社会の課題を解決するために、私たち一人ひとりのマネジメント能力を高めましょう。

一、「私たちの仕事はまちづくり」をモットーに、地域の人材育成を通して「三河のまちづくり」に貢献しましょう。

一、無限の可能性に挑戦できるように、知・徳・体を鍛え上げるだけでなく、社会人基礎力も鍛え上げましょう。

一、建学の理念「庶民性と先見性」を実現することによって、安城学園の歴史と伝統を継承・発展させましょう。

教職員の皆さんは、この憲章の下で自由に振る舞っていただきたいと思います。この教職員憲章の下で、「私はこれが得意だ」「私はこれをさらに伸ばしたい」などなど、一人ひとりの教職員の皆さんが全エネルギーを注いでいただければと願っています。

挑戦には三つのタイプがあります。「今まで取り組んできたことの中で、できなかったことをできるようにする」という「第1の挑戦」、「できることをさらにレベルアップさせてもっとできるようにする」という「第2の挑戦」、そして「成功するか・失敗するか分からないけれども、今まで取り組んだことのないことに一歩前に踏み出す」という「第3の挑戦」です。教職員一人ひとりの潜在能力を可能性の限界まで開発するために、この「三つの挑戦」に是非取り組んでいただければ幸いに存じます。

今9時57分で残り3分程ありますが、これで終わらせていただきます。ありがとうございました。